

鳥取県現代俳句協会会報

第51号
令和4年11月

追悼

野田哲夫先生の作品から

鳥取県現代俳句協会 会長 植垣規雄

今年の梅雨明け間近に逝去された前会長野田哲夫先生の作品をここに紹介し、先生を偲ぶこととする。先生の晩年の句会や俳句教室に提出された作品から抽出した。余所行きでない普段着の先生の横顔が窺われると思う。

私が最初に出合った時の先生は、厳しい雰囲気をつらつらとした人のように思えた。確かに、カナとひらかなの表記の是非から作句姿勢まで突っ込まれることもあった。だが、席を同じくするにつれ先生の真の温かみや深みを徐々に知ることとなった。

先生は日頃「自分はへそ曲がり」だと言われていたが、なかなか、季節感ある情景を正面から詠んだ句は決して少なくない。

- 日向雨春の日傘を濡らしゆく 平成24年
- 水中のやうな良夜を歩きけり 平成24年
- 千本格子の向かうを過ぎる十二月 平成25年
- 水槽のやうなコンビニ夜半の夏 平成28年
- 雪に灯を落として停まるディーゼル車 令和2年

しかし、先生の真骨頂はやはり次のような作品であると思う。惹かれる句が多い。そして教わることの多い作品である。

- 白海豚メビウスの輪を吹いて去る 平成27年
- 初湯浴む昔は緒であつた四肢 令和1年
- ライオンに似た向日葵を飼っている 令和1年
- 春の雪われも睫毛をもつけもの 令和2年
- 秋吹く風わが手我が足放れゆく 令和2年
- あるとき、ベランダからカラスへ餌を投げてやると先生から聞いたことがある。身のまわりの小動物への先生の目は優しい。
- にんげんのつもりの犬と西瓜食ぶ 平成23年
- 猫の掌のいきなり叩く木の実独楽 平成28年
- 床に鼻つけ眠る猫小正月 平成30年
- 口赤く啼き寄る猫を抱けば冬 平成30年
- 先生の住まいは千代川の河口に近い。また、湖山池近くの句会へ通っておられた。季節ごとの詩情ある湖の景である。

日の射して湖心の鴨の陣緩む
水匂ふ春の夕べの湖の町 平成25年
大寒や大湖の水の動かざる 平成26年
夜の秋対岸の灯の瞬かざす 平成27年
先生は昭和7年生まれ。ご自身の来し方行く先を考えられることもあつたに違いない。

剥がれゆく戦後を集め落葉焚く 平成26年
酔醒のやうに残生小春風 平成27年
春立ちて私のるない湖景色 平成29年
煮凝や霞む昭和を著に割る 令和2年

同時に、遠き日のご両親への思い、特に母への追憶の念は強い。

七日粥湯気の向ふに若き母 令和1年
若き日の母見失ふすずらん市 令和1年
秋日傘差して異界へ帰る母 令和1年
春炬燵いつの間ははの往になりし 令和3年
鳥取の俳人にとって「砂丘」は格好の句材である。そして、砂丘にはいつも駱駝がいる。

月の砂丘駱駝は夢の旅を踏む 平成29年
炎天の砂丘駱駝の遠目かな 平成30年
黄砂来る砂丘の駱駝立ち上がる 令和1年

平成10年代、先生は「朝日俳壇」の金子兜太の選の最後の十句目を狙っておられた。十句目とは、実験作、大胆自由な句と聞いている。はにかみながら先生が披露されたであろう、その十句目に入つた句を挙げておく。

梅林でポップコーンが爆せている 哲夫

山池近くの句会へ通っておられた。季節ごとの詩情ある湖の景である。

哲夫

野田哲夫さんを偲んで

さよなら哲夫さん

中田 七重

哲夫さんのお付き合いは、鳥取県現代俳句協会のメンバーとしてはじめて出合ってから、かれこれ三十余年にもなろう。彼は鳥取、私は米子、近くて遠い距離にいて、会うのはほんの年に数回のみ、はじめはそれほど親しくなれるほどの機会もなかった。

メンバーとしてはじめて臨席した総会のあとに催された親睦会は楽しかった。私は遠慮なく好きなビールをがばがば飲み、何と哲夫さんもまた然りて早速意気投合、それからというもの折にふれては愉快な酒を酌み合う様になったのである。

いつぞやの中国大会の折には懇親会のあと二人で会場を抜け出し、二次会と称して深夜まで語りつつ痛飲、おかげで翌日の勉強会では頭痛をかかえて勉強にならずといった馬鹿な笑い話もあって、哲夫さんは私にとって、遠くて近いよき友人であった。

啜え煙草に目を細め、選句などされていた様子が今も目に浮かんでくる。秋深むこのごろ、思い出しでは淋しい。

酒を好み、煙草を好み、そして何よりも俳句を好み愛した一生であったと思う。
さよなら哲夫さん。いつか又、どこかの星で逢えるといいね。

哲夫亡し深秋の酒酌むばかり

七重

足立 六歩

初めて言葉を交わしたのは、美保関の吟行のとき。飾らない人柄で最初から私を「六さん」と呼んでくださりうれしく思いました。お酒が好きな印象があります。忘年会のときは、やたらに紹興酒が旨いからとすすめられた思い出があります。山口の中国大会宴席のあとのカラオケもおもしろかったですね。野田さんの句で好きなのは絶対これ!!

耕して去年の石にまた当たる

哲夫

誰にでも共感出来る人生の句ですよ。

石谷かずよ

鳥取県現代俳句協会に入会して以来15年、思えば野田さんとの会話はいつも俳句の話ばかりだった。良き先輩として、またある時は厳しい先生として、そしてまた気の置けない仲間として、多くの時間を共にさせていただいた。

何気ない会話からも伝わってくるのは俳句に対する溢れるような思いであり、句を語る眼差しの中に常に詩情を求める青年のような瑞々しい情熱の炎があった。

できることなら今一度大好きだったお酒を酌み交わしながら、熱のこもった弁舌に酔ってみたい。

その繊細且つ深遠な精神は、親しみのある笑顔と共に今も深く私の中に生きている。

バルハンは大いなる耳鳥雲に

哲夫

すむらのりこ

俳句教室では、いつも野田先生の隣でした。あるとき、「僕はマザコンで、亡母のことは自己流に『はは』にしています」と。そんな親しいの先生のお人柄がよく出ている私の好きな句です。

若き日のはは見失ふ蕎麦の花

哲夫

ときどきの飄然とした受けこたえに、親しみを抱き、句と共に年を重ねることのよさを感じさせて下さる大きな存在でした。さびしいかぎりです。

「背のびせず、らしい句を作りなさい」先生の声がか聞こえてきそうです。ありがとうございました。

松島美佐子

野田さんの俳句の評は辛口で、的を射っていました。時に落ち込み、反対に褒められると妙に自信が出て奮起しました。野田さんはお洒落でダンディでした。寒の頃、手元にあった毛糸で、編み込み模様の帽子を編み、お見舞いに送りました。早速に、「この帽子はあつたかくピツタリで愛用している。ありがとう」とお礼の電話がありました。明るい元氣なお声でした。それが野田さんの声を聞いた最後の言葉でした。

バルハンは大いなる耳鳥雲に

哲夫



感謝

岡 みずき

野田哲夫さんは、平成12年より事務局長、会長、顧問として24年間、当協会の運営に多大なご尽力をいただきました。また鳥取県俳句協会会長、日本海新聞俳壇選者として鳥取県の後進指導に深く携わってこられ、感謝の念でいっぱいです。

几帳面でいつもぶれない精神力、新しいことへ挑戦される姿に私はいつも敬服しておりました。

いろんな機会に話してくださった、俳句に「ボエムがないとだめだよ」との言葉は、短歌をされていた野田さんらしいメッセージで、一番胸に突き刺さった言葉です。以来その気持ちを意識し俳句に向かう姿勢が変わったのはごく自然のことでした。

精一杯心を寄せ、一緒に会の運営に関わってきて思いがけない突然の別れは辛いものです。

喪失や樹間を急ぐ飛花落花

哲夫

グラッパを薄めて白き夏満月

5月に野田さんから届けられた最後の俳句5句のうち2句です。揺れ動く相反する心情。どちらの句も私には抱きしめたいほど寂しい句に思えてなりませんでした。

まぼろしのような4か月が過ぎ、何事もなかったように、ご一緒に吟行した氷ノ山では、もう黄落が始まっています。

雲の沖神の発ちたる嶺々の浮く

哲夫

逝去謹悼

野田 哲夫 令和4年6月28日

諸家近詠 (五十音順)

我とわれ思いを異にみどりの夜

足羽 鮮牛

まんぼうは跨るによき夏星座

足立 六歩

ゆりかもめかの世の川もゆりかもめ

みちくさの下校の児等と稲雀

秋風や大根島のカフェテラス

たおやかに且つしたたかに秋ざくら

水鏡深さを覗く星月夜

沈黙の重さに耐えかねて柘榴

ねぎらつて鉢を取り込む冬支度

A型に近きO型林檎剥く

はらからの退院近し小鳥来る

Uターン余所より高く稲架を組む

夕日まだ一樹に残りつくつくし

吾亦紅叫ぶ寡黙でいるために

追つてくる秋蝶海の蒼揺らし

息をせぬ子の手さするや露の朝

子の逝きし日の満月のしみけり

片腕の無き骨ひろふ秋の風

行く秋の今季を仕舞う山の宿

忘れ物取りに戻る子神の留守

皿盛りの中骨厚き鱈の粗

百日紅届くかぎりの空に触れ

零れゆくほどに深まり萩の白

はらからの四方山話秋の家

白地図に離岸流描く夏の果
渋柿を食って異界へ降りていく
梨二つ両手に載せて善と悪

滝本 勤

惜秋やまなこ細めて針の穴
鬼の子のぶらりぶらりと暮れにけり
星降る夜の窓を叩いて訪ね来よ

中田 七重

うるうると我を惑わす月夜茸
秋の暮記憶の街へ紛れ込む
稲妻に寝際の顔を射られけり

原 あざみ

手話踊るバスの窓越し良夜かな
甲蟹裏返り泳ぎをり小春
冬天や置き忘れたる月の鎌

平尾 隆実

頃合の大根傍に秋刀魚かな
今日の月雲の間に間に見えにけり
新豆腐くれたる後に友病みぬ

福田 七重

草風浮世儂む執拗に
目印は赤まんまなり今もなお
惜別のよけて通りし熟柿かな

藤原 博志

両眼のオベを待つ朝小鳥来る
露霜やもはや径なきわが廢墟
先乗りてふ旅上に一人黄葉映ゆ

増井ゆり枝

ふりむけばだあれもない秋の声
雲切れて鷲峰山見ゆる秋彼岸
取り込みしシーツの染みや放屁虫

松島美佐子

夜の秋灯り消えゆくケアハウス
塩焼きにしたる細身の初秋刀魚
道曲がれば一軒家あり紫苑咲く

吉村 良子

爆風に月桃の実の血潮鳴る
鳥獣の墓域は知れず曼珠沙華
核の脅しに怒りの拳石榴の実

渡辺をさむ

新会員紹介

平尾 隆実

放哉の俳句には興味があり、いつか自分も俳句を作ってみたいと漠然と思っていました。

退職後しばらくして、公民館の句会に入り句作の手解きを岸本砂郷師から受け、後に野田哲夫師に指導して頂きました。

数年前に野田師から準会員に誘われましたが、当時はボランティア活動に追われていてお断わりしていました。今年後期高齢者の仲間入りを果たしたのを機に、ボランティアも卒業し、俳句に専念してみようと決心した次第です。句歴は十年と長くなりましたが、未だ初心者の域をウロウロしています。皆様の御指導を頂きながら励んでいきたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

颱風の磨きし星の素顔かな 隆実

今、伝えたい俳句 残したい俳句

10月

海光のときおり暗み梨授粉 足羽 鮮牛

地区協会報を読む

10月

葉桜のうすき昏みへ紛れ込む 岡 みずき

俳句年鑑2022を読む 感銘十句抄

6月

ゴッホよりうねり始めし星月夜 石谷かずよ 永野 照子選

9月

土に触れ臍腑にふれる春の宵 滝本 勤 丸山美沙夫選

10月

雪掻くや人の住むこと証したく 増井ゆり枝 勝山ひろし・本田 巖選

現代俳句の風 感銘十句抄

7月

熱帯夜鯨大きく反転す 藤坪 憲男選 松島美佐子

10月

鶏頭を掴めば柔らかき内腑 滝本 勤 伊波とをる選

小田桐妙女・森野 稔選

黄落期肺にせずかな音がある 岡 みずき

現代俳句「列島春秋」寄稿句

5月

花樗句ふ辺りに埋葬す 増井ゆり枝

6月

髪切つてランナーになる夏初め 滝本 勤

7月

梅干すや百年ほどの人の世に 中田 七重

8月

ホチキスの音高く閉つ梨の箱 坂出 徹

9月

うかつにも花野の真中にて転ぶ 原 あざみ

10月

ポジョレ一買う最長老は赤が好き 寸村 紀子

現代俳句の風 発表句

5月

駅行きバス待つ人の新スーツ すむらのりこ

6月

向かいの子手を振る春の雪しきり 滝本 勤

7月

失ひし乳房のやうな丘青む 中田 七重

8月

紙風船ひいふうみいと嫗つく 松島美佐子

9月

思ひきり捨ててこの世のソーダ水 中田 七重

7月

ジグソーパズル一片欠けたままの夏 岡 みずき
人肉を食うという蟹今日食らう 滝本 勤
手火のすべての色を覚えけり 原 あざみ

8月

熱帯夜鯨大きく反転す 松島美佐子
峰雲は胸のまほろば父がいる 石谷かずよ
老鶯や谷戸の奥より暮れかかる 坂出 徹

9月

秋天のどこまで青し馬の目に 中田 七重
黄落期肺にせずかな音がある 岡 みずき
鶏頭を掴めば柔らかき内腑 滝本 勤

10月

色鳥のくるりくるりと休肝日 原 あざみ
ポケットにつめる喜び木の実降る 松島美佐子

編集後記

野田哲夫先生が逝去された。コロナ禍の中、お見舞いに何うことも叶わず、何人かが電話で話を交すことができただけだった。野田先生はその風貌とともに頼もしい頼りがいのある大人であった。昨年の岸本砂郷先生に続いて、大きな先達を亡くして、寂寥感、喪失感が濃い。(滝本)

鳥取県現代俳句協会会報第51号

令和4年11月発行
発行人 植垣 規雄
発行所 鳥取県現代俳句協会
事務所 千六八〇一〇八六三
鳥取市大覚寺一三三一一〇九 岡 みずき 方
電話・FAX (〇八五七) 二四一七六四〇